

中世私家集の断簡三種 ——『公経集』・『道玄集』・存疑『親清四女集』等について——

小島 孝之

はじめに

近年の古筆切研究の動向には著しいものがある。かつて、こうした面からの研究の必要性を推した者の一人として、予想外の、と言ってもよいくらいの繁盛ぶりで見えある。それは嬉しい事態ではあるが、反面、古筆切を資料として用いる場合に避けて通れぬ難関をさして意識もせずに、安易に資料に組み込んで議論を展開する向きもないわけではないように感じられる。その最大の問題点は何と云ってもツレと認められるか否かという、資料の同定の困難さである。たとえ極札に書かれた筆者名が同一であっても、

同筆と断定することは存外難しいのであるが、まして、現物を直接手にして比較できることがほとんどないという現在の状況は、それを決定的に困難にしている。たとえば、『古筆学大成』のあの詳細な分類においてすら、ツレでないものをツレとしていたり、その反対に、ツレの断簡を別々の筆者名に分別しているといった誤りがないわけではないことが、近年しばしば指摘されている。誤解がないように言葉を補っておくが、これは決して『古筆学大成』の比類ない業績に対して毛を吹いて傷を求めているわけではなく、それほどツレの同定が困難だと言いたいだけである。古筆切は、ある意味で切はあくまでも切に過ぎないのであって、伝本研究の補助的な意味あいを脱することは非常

に難しいと考えなければならぬ。しかし、さはさりながら、古筆切に基づかなければ出来ない側面があることも疑いを入れない。その辺りの微妙な関係を慎重に配慮しながら、進められなければならないと考える。

一つには、先学の分別した同定の結論を、後人は新たな知見を加えて絶えず再検討する責務がある。そうした作業の繰り返しによって資料として使える水準に次第に近づくのだと言っておきたい。

二つには、散逸した伝本、とりわけ、現存伝本の皆無に近い作品の本文の復元は、古筆切の有効性を示してあまりある事実である。

後者については、そのほぼ全貌を見渡した、最近のすぐれた成果として、久保木秀夫氏の『散佚歌集切集成 増訂 第一判』（二〇〇四〜二〇〇七年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書）を挙げられよう。こうした研究の積み上げによって、徐々に文学史の欠落部分が明らかになってゆくことも期待できよう。

本稿は、そうした散佚私家集の欠落部を解明する一助として、若干の新出資料を提供しようとするものである。

一 伝慈円筆『公経集』切

西園寺公経の家集は近年までその存在を知られていなかった。初めてこれに言及したのが、曾根誠一氏、伊豆野町子氏の「〈資料紹介〉架蔵手鑑の和歌・物語切抄稿」（『九州女子短期大学紀要』第二十二巻第一号、一九八六年二月）であった。ご架蔵の伝慈円筆の私家集が公経の家集であろうという重要な指摘がなされた。残念なことに写真が示されなかったので、筆跡を確認できずツレを発見することもできず、そのままに放置されたような格好になっていたのであるが、この事態を大きく動かししたのは、近年精力的にかつ精緻に古筆切資料について調査研究を進めている久保木秀夫氏である。まず、「散佚歌集切集成 本文篇」（調査研究報告）二十三号、二〇〇二年十一月）において指摘され、続いて、「古筆切のツレの認定―伝光嚴院筆六条切の問題を中心に―」（国文学研究資料館編『古筆への誘い』三弥井書店刊、二〇〇五年三月）で、曾根誠一氏ご架蔵の模写切の写真を掲げ、同じく掲出した金沢市立中村記念館所蔵手鑑に収載されている伝慈円筆の私家集断簡の写真の両者の筆跡

が一致すること、内容的に公経の歌集と考えて何ら矛盾が生じないこと等を述べて、『古筆学大成 第二十五卷』にツレとして納められる他の二葉とともにこれらが『公経集』の断簡であることを確定された。また、同書『古筆への誘い』には、佐々木孝浩氏蔵のツレも一葉掲載されており、一挙に五葉の存在が確認されるに至ったのである。この一連の研究を受けて、日比野浩信氏は、あらたに三葉の新出切を加えて佚文を集成し、詳しい検討を加えた（伝慈円筆『公経集』切について）『和歌文学研究』第九十三号、平成十八年十二月）。同集についての研究史は、右の日比野氏論文に詳細に述べられているので、以下は省略に従うが、その後さらに、久保木秀夫氏は、『散佚歌集切集成 増訂 第一版』（前出）でそのすべてを列挙している（ただし、日比野論文の最後の一葉は、ツレとは断言できないものとして、やや慎重を期されている）。

ところで、ここに日比野氏論文及び久保木氏集成が触れなかったツレの『公経集』切とおぼしき断簡の記録があるので、挙げておきたい。それは、平成八年十二月刊の『福地書店和本書画目録』に「S1666 掛軸 慈鎮和尚 詠草 切七首」として掲げられたものである。研究者の入手する

ところであろうかと思ひ、公表を控えていたのであるが、十年余りを経ても発表された様子がないので、もしや研究者以外の人の手に渡ったのであろうかとも思われ、そうだとすると、このまま消えてしまう恐れもなきにしもあらずなので、とりあえず存在することを明らかにしておくべきであろうと考えた次第である。

図版はあまり鮮明とは言えぬ写真であるが、筆致などが一連の「公経集切」と同じ、即ちツレと判断できる程度には筆跡の癖などを確認できるので、ここに掲げておく。寸法は右の目録には31×26とあり、日比野氏の掲出されたものの中で料紙の天地が最大の、志香須賀文庫蔵断簡の三〇・八センチをさらに上回るが、販売目録記載の寸法ゆえ、「およそ」の寸法と理解しておくべきであろう。したがってほぼ同寸法と言って差し支えあるまい。

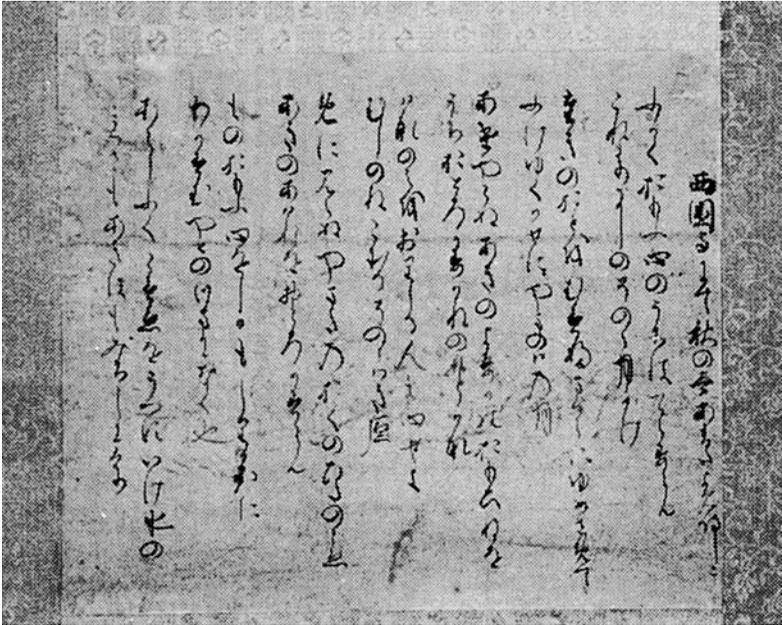
次に図版の複写と翻刻を掲げる。

西園寺にて秋の哥あまたよみ侍しニ

ふかくおもふ心のうちはてらすらん

これ□□にしのその、月かけ

たきのおとをむすふまくらにゆめさめて



ふけゆくかせにやまのハの月
 あけやらぬあきのよすかのおもひねを
 うちおとるかすかねのおとかな
 ハなのえをおりしる人は心せよ
 むしのねこむるその、ハき原
 めにみえぬやまたのおくのひたのこゑ
 あきのあはれをおとるかすらん
 ものおもふ心をしかもしりかほに
 わかすむやとのつまになく也
 あらしふくこすゑをうつすいけ水の
 □□さもあきほもみちしにけり

冒頭の詞書に「西園寺にて秋の哥あまたよみ侍しに」とあり、作者名を記さない形態は、これが私家集の一部であることを示すとともに、作者が西園寺氏である蓋然性をも示している。佐々木氏蔵断簡にも、「西園寺に八重桜をうゑ侍しころ」とあり、すでに日比野氏が詳述しているのと同様に、本断簡の詞書・内容もそれと矛盾しない。筆跡の類似とともに、内容的にも『公経集』の散佚断簡であることを支持すると思われる。この七首の歌のうち他に

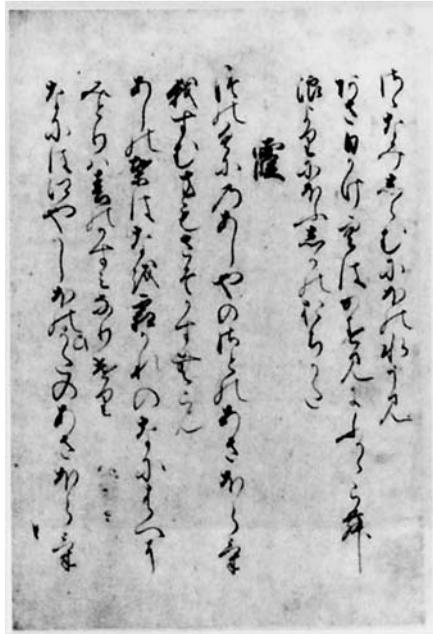
書にも見えるものは一首もなく、すべて新出歌かと思われるが、この七首は公経の歌とすることができるのである。従来知られていなかった公経の家集が存在したことが実証された今は、一首でも多く散佚部分を発見することが期待され、本断簡はその一翼を担うものであらう。

二 伝中山定宗筆「国栖切」について

従来、未詳歌集とされてきた伝中山定宗筆「国栖切」が道玄の家集であることを、徳植俊之氏が明らかにされた。「国栖切」の名は国宝手鑑『見ぬ世の友』によって名づけられていたが、そのツレとしては、徳川黎明会蔵古筆手鑑『玉海』所収の「一葉と合わせて二葉しか知られていなかった。私はかつて琴平神社所蔵の古筆手鑑を調査させていた。折り以来、手鑑『古今筆陳』所収のもう一葉「国栖切」があることを承知はしてはいたが、しかしそれが誰の家集であるかは皆目分らないままであった。しかるに、ごく最近徳植氏が、「国栖切」考―道玄とその家集―（久保木哲夫氏編『古筆と和歌』笠間書院刊、二〇〇八年一月）において、右の三葉に加えて御架蔵の二点と『麗藻台』所収

断簡一点の都合六点を紹介し、『麗藻台』所収断簡中に、『風雅集』に入集した道玄の歌があることを発見され、「国栖切」がその道玄の家集の断簡であることを解明されたのである。ここにまた、散佚した中世歌人の家集が一つ明らかにされたことはまことに欣快至極である。おもしろいことに、同じ発表舞台となった『古筆と和歌』には、日比野浩信氏の「私家集断簡拾遺―広沢切・野宮切・御文庫切・国栖切など―」という論文が載り、そこにも個人蔵「諸家集手鑑」所収の私家集断簡七種のうちの一葉に新出の「国栖切」が紹介されていた。これで合わせて七点になったわけである。このように作品名が分かってみれば、従来、単に作品不明の私家集切としてきたものの中にもツレを見出すことができるようになる。徳植氏、日比野氏の功績はまさに大きい。私の手許にも、『玉海』及び『古今筆陳』所収切のツレとしてのみ処置してきた「国栖切」一点の記録がある。ここに掲げて、徳植・日比野両氏の論考に一点を加えておきたい。

平成十一年十一月に東京古典会が主催した古典籍下見展観大入札会の目録に掲載されたもので、これも誰か研究者が入手されているかもしれないのであるが、すでに九年を



本文は次の通り。

さ、なみしらむにほの水うみ

あさ日かけ空はかすみにふか、らむ

浪よりにほふしかのおちかた

霞

つのかのあしやのさとのあさほらけ

我すむ方もさそかすむらん

あしの葉はなを霜かれのなにはへに

みとりハ春のかすみなりけり

なには江やしほのかたのあさほらけ

経過しており、今もって紹介されないの、あるいは研究者以外の人の有に帰したのかもしれない。これも目録掲載の写真は必ずしも鮮明ではなく、小さな写真だが、本文を読むには差し支えない程度のものである。寸法については記載がないが、展観に際して実見した記憶では通常の四半切であったように思うが、おぼろげな記憶に過ぎない。

この三首と上句下句各半分ずつの都合五首を他に見出すことはできなかつた。他歌人との贈答の中に見出されるものがあるかもしれないし、私撰集に入集しているものがないとも限らないが、現時点では十分に確認できていない。「国栖切」中の歌に見られる特徴については、徳植氏に詳細な指摘があるが、本断簡所収の歌にも同様の特徴が幾つか見られるようである。「霞」題の第一首目の、

つのかのあしやのさとのあさほらけ我すむ方もさそ

かすむらん

は、藤原政範の家集である『政範集』一〇一番歌、

つのおくの難波のさとのむめのはないまは春べとさぞ

にほふらむ

と極めてよく似ており、「難波」の地名を「昔屋」に移し、「むめのはな」を「あさばらけ」に変え、「にほふ」を「かすむ」に変えているだけで、配置はまったく同じである。両者に関係があることは確実であろうが、どちらが先行するかは判断は難しいところである。井上宗雄氏の「藤原政範集を紹介し実材御母集等との関係に及ぶ」（『国文学研究』六九、一九七九年一〇月。同氏『鎌倉時代歌人伝の研究』一九九七年、風間書房刊所収）が示す政範の先行歌の模倣ぶりから見ると、政範の方が道玄の歌に学んだと考えるべきなのかも知れない。道玄は嘉禎三年（一二三三）に生まれて、嘉元二年（一二三〇）に没したのに対して、政範についてはその生没年すら明らかにできない。井上氏は同書所収の「平親清の娘たち、そして越前々司時広」という論文で、『政範集』は、実は実材母の次女（つまり平親清女）の家集ではないかとされる。もしそうであるならば、次女は暦仁元年（一二三八）の数年前の生まれということになりそう

である。いよいよもって、両者の前後関係は推測しがたい。いづれにせよ、散佚私家集である『道玄集』の新出歌を五首（二首は上句・下句のみ）加えることが出来たわけである。

三 三井文庫蔵手鑑『筆林』所収伝二条為氏筆未詳私家集切について

かつて三井文庫所蔵の古筆手鑑『筆林』の複製を刊行した（一九九五年六月、貴重本刊行会刊）折り、「二条家為氏卿」の極札（琴山印）を有する未詳歌集切があった。その解題（中村文氏担当）を決定するまでにいろいろ手を尽くして手掛かりを捜し求めたが、とうとう分からずじまいであった。その後も折りにふれて手掛かりを求めていたところ、ようやくツレと見られる断簡が出現した。それは、平成一〇年に発行された『柏林社古書目録』の7に「集未詳切 冷泉為相」として掲げられた写真である。あまり高額だったため入手を断念したが、その後、平成十五年四月発行の同目録に「6 集未詳切 冷泉為相筆」として同じ物の写真が掲載されていた。こちらには、「冷泉殿為相卿」という極札の写真も添えられているが、鑑定印がなく、鑑定者不明である。今度は値段も三分の一ほどに下がり、入

手可能な程度の金額になっていたが、そのときは手許に自由になる資金がなかったの、見送らざるを得なかった。この金額であればおそらく誰かが入手しているに違いないと、その発表を待ったが、今日まで発表された形跡はないようである。このまま放置しておく、忘れ去られる危険もありそうなので、この際、もし研究者がお持ちであれば、所有者には申し訳ないが、右の二点との類例として、ここに挙げさせていただくことにする。『柏林社古書目録』の方には寸法の記載がないので、大きさの比較はできないが、図版を比べてみれば、両者がツレであることは一目瞭然である。同一文字が多く出てくるので比較は容易である。漢字の「鹿」「声」「山」の字形・筆致はほぼ完璧に一致している。何度も出現する「さをしか」は言うに及ばず、同じ文字の続く「あはれ」「おもひ」「きく」「つま」や「ふらめ」と「ふらん」、「まよふ」と「かよふ」など、同一人の筆跡であることを疑う余地はない。片や「二条為氏」の極めを持ち、もう一方には「冷泉為相」の極めがあつて、鑑定は相違するが、このような違いはしばしばあることで、問題にするには当たらない。さらに『筆林』所収切が「磯辺鹿」、「柏林社古書目録」所収切が「月前鹿」の題を有し、

ともに「鹿」題の歌ばかりから構成されているなど、両者がツレであることはほぼ疑いが無い。左に本文を翻刻する。

さこそはしかもつまをこふらめ

きくからに秋のあはれもおほえやま

いくのにまよふさをしかの声

なくもみやまにふかくいるしかの

なみたやのこるのへのしら露

さをしかのこゑやしほれてきこゆらむ

しくる、山のあきのゆふくれ

月前鹿

さをしかはうき世のほかのかけそとも

おもひしらてや月になくらむ

すべて鹿を題とする定数歌の一部と見える。ここに、あらためて、『筆林』所収断簡の図版の複写と本文も並べてみよう。

わかことやはれぬおもひにむせふらん

きりたつ峯のさをしかの声

やまふかみはれせぬみねのゆふきりに
つまよふしかやみちまよふ覧

きくたひにあはれそまさるあかつきの

まくらにかよふさをしかのこゑ

ゆふきりにつまこめてなくさをしかの

こゑもかなしきあきの山さと

磯辺鹿

ひさかたのいそこすなみにたつしかは

『筆林』所収断簡について考えていた時には、誰かの「鹿百首」のようなものであるかと考えたのであるが、それ以上には踏み込むことができなかった。ところが、『柏林社古書目録』所収断簡が出現してみると、その三首目「なく〜も」の歌が『平親清四女集』の九一番にあることが分かった。してみると、これらの断簡は、親清四女の家集の一部かという可能性が出てくる。『新編国歌大観』所収「親清四女集」の解題（菊地仁氏担当）によれば、書陵部所蔵本が唯一の孤本であって、後人による編纂であるという。だとすると、それらの編纂の元になった親清四女の歌を書き留めたものがあつたはずであり、そうした資料



となつた家集の一部であると考えられることも可能であろう。しかしまた、一人でこれだけの鹿題、しかもどうやら組題であるらしいから、それを詠むほどの力量が彼女にあつたかどうか、いささか疑問とならなくもない。そこで第二の可能性として、何人かの歌人が同一題で読んだ歌をまとめた定数歌の一部ということも考えられるであろう。すると、



「月前鹿」題の前の歌の後から二首目が親清四女の歌であるから、同じ並び順に位置する、「磯辺鹿」題の前の歌の後から二首目の、「きくたびに」の歌が親清四女の歌であるということになるのかもしれない。『新編国歌大観』所収「親清四女集」の歌を読んでみると、右の「なくくも」の歌の次に並ぶ九二番の歌、

月になくおばすてやまのさをしかはなぐさめかねてつ
まをこふらし

が、断簡所収の歌とまったく同じ傾向を示す詠みぶりであると思われる。してみると、この九二番歌は、『柏林社古書目録』所収切に続くはずの「月前鹿」題の歌だったのかもしれない、というように考えられるのではなからうか。憶測に過ぎるかもしれないが、さらにツレの断簡が出現することを鶴首して待ちたいと思う。

なお、これに付して、一点の断簡にふれておきたい。それは昭和六三年十月に出された『思文閣墨蹟資料目録』第195号に「107 二条為氏 和歌七首切 紙本巾三九糎／豎二八糎 総丈巾五〇糎／豎一〇九糎 絹装箱入 二、五〇〇、〇〇〇円」という見出しで掲出された断簡である。のちに平成八年十一月の東京古典会にも出品され、同年の『古典籍下見展観大入札会目録』に「67 二条為氏筆 和歌幅七首 一幅」として写真が掲載されている。これも未知の定数歌が私家集の一部らしく、歌と歌との間の行間をやや広くとる書写形式が同じであること、「二条為氏」の伝称筆者名を有することなどから、当初、これは『筆林』所収切のツレではなからうかと考えていたのであるが、丁寧に



観察すると、同じ筆者名を与えられるだけあって筆跡はきわめてよく似ているが、右の二葉の一致度に比べれば、いささか異なるような印象を拭えない。記載された寸法が正しいとすると『筆林』所収切は竪二三・二糧であるから大きさが違い過ぎる。竪二八糧というのは、何か間違いがあるのではないか、などと疑っているが確認はできない。二八糧であれば、大きさが違いすぎるので、今は一応別の作品かと判断しているが、参考までに、翻刻と図版の複写を掲げておく。

さひしさをいかてしのはんやまさとの
きりたちこむるあきのゆふくれ
しくれするをかへにたてるは、そはら
いつまでとてかあをはなるらん
ひかすふるしくれのあめのほとみえて
もみちこかる、みふねやまかな
あきのゆくことこそあらめもみちさへ
けふをかきりとちるそかなしき
世中をうしとはかりはおもへとも
すつるこゝろのなきそかなしき

あはれけにうきよのなかにやともかな
人かすならぬみをもかくさむ
しはしとてやすらふほとにとしつきの
いとふうきよにつもりぬるかな

という七首である。前半四首は秋の歌、後半の三首は述懐歌であろうか。「鹿」題でもないし、内容的にも『筆林』所収切や『柏林社古書目録』所収切とは、そのあり様を異にしており、やはり、別作品と考えるべきなのであろう。この七首の中に今のところ、『新編国歌大観』CD-ROMで検索した範囲では、他歌集中に同一歌を見出せない。類似定数歌もしくは私家集の一部として気になっている。

それにしても、これなど、冒頭に述べた、図版によるツレの同定の難しさを示唆する好例となるかもしれない。なお、ツレの同定の困難さを表す具体例を別稿（『成城国文学』第25号掲載予定）に掲示するつもりである。